

〔奥義抄上末物異名〕三月 風雨あらたまりて、草木いよくおふるゆるに、いやおひ月といふをあやまれり、

〔語意考〕三月を也與比と云は、草木伊也イヤオ於比月也、二月に芽を張、三月に繁る故に彌生といふ、のいや常略くは、草木をいはぬは、上に二月にいひしかば、ゆづりて略けり、月の名は多くは他の月と相對へていふ也、

〔倭訓栞前編三十四也〕やよひ 三月をいふ、彌生の義よとおと通ず、春三月を生月、氣更來、彌生と次第したる名なるべし、

〔古今要覽稿時令〕やよひ 三月、やよひとは三月をいふ、日本書紀神武紀の訓には、はじめてみえたり、

中むかしよりして、やよひの文字彌生と奥義抄かけり、草木のいやおひしげれる比なればいふなるべし、やよひにうるふ月の有ける年と古今和歌集詞書いひ、草木いよくおふる故にいやおひ月といふを、あやまれりと奥義抄いひ、一切草木芽至此月彌生、故云彌生也、下學集いひ、草木の彌生てふよし、古説のごとく成べしと類聚名物考いひ、萬物彌生するなりと海部光みえたり、三月をやよひ月といふは、草木いやおい月也、二月に芽をはり、三月にしげる故に、彌生といふと意いひ、やよひ、三月をいふ、彌生の義よとおと通ず、春三月を生月、氣更來、彌生と次第したる名成べしと和訓いへるぞ、げにもとおもはる、説なり、本居宣長いひけらく、凡て月々の名ども、昔より、説共あれど、皆

わろし、其中にたゞ三月を彌生なりと云類のみは、よしと古事記傳詞みえたり、彌生は古今人々の説々同一致なれば、義論はいさ、かもなき也、扱異名は暮春と和名類聚抄いひ、律名を沽洗と拾芥抄

みえしは、律中沽洗と禮記月令みえしによられしなり、さはなつきと秘藏抄いひ侍るも、此月の異名なり、又花津月と莫傳抄いひ、夢見月とも同上いひ、花見月、櫻月、春惜月とも藏玉集抄いへり、西土にては、季春

と禮記月令いふも、此月なり、又宿と爾雅書るも別名にして、三月得丙、則曰修、病と同上みえたり、季春之月、